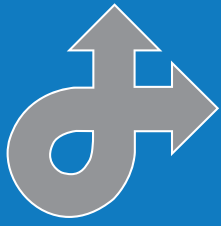


新制作

SHINSEISAKU

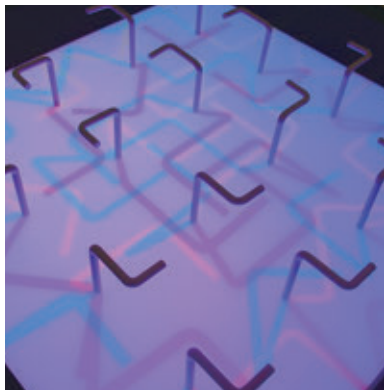
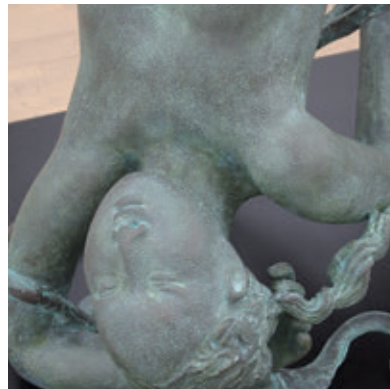


Vol.68/2014

新制作協会 広報誌

# 第78回展

国立新美術館 2014.9.17-9.29





## 審査陳列報告



### 絵画部

佐野 めい

2014年の新制作展は、無事終了しました。すでに秋の気配となり、絵画部は早速来年に向かっての諸問題に取り組んでいます。

先ず2014年の審査・陳列報告を致します。第78回の新制作展公募データは下表の通りです。審査は、9月5日（金）、9月6日（土）の2日間、国立新美術館の審査会場で厳正に行われ、入選者が決まりました。

次に16日（火）は受賞者を決め、新制作全員の陳列を午前10時より始め、午後5時まで完了しました。

授賞会議で新会員1名、新作家賞8名、損保ジャパン日本興亜美術財団賞1名、絵画部賞5名が決まりました。新会員、受賞者の皆様、おめでとうございます。

新制作展初日9月17日（水）より29

日（月）の最終日までをふり返って見ますと、全体的に、それぞれの作品が美しく見え、パーテーションの配置も良かったのではと感じました。

広い空間で2階の会員陳列室と、一般出品室との取り合せもよく、皆様の協力に感謝申し上げます。

2点入選の作品は上下二段の組み合わせで、あとは殆んど、一段掛けの新制作本来のスペースになりました。会場の印象は、ご覧下さった方々によりよい魅力を持っていたかと思えます。

1点1点の作品から伝わって来る緊張感も新鮮でした。今年の入選者、受賞者、新会員の会議ではいつもの年より厳選になりました。

明日への問題は山積しております。先ず描き続けていくこと、絵画の未来への展望を肯定的にとらえて、皆様と一緒に進んでまいりたいと思います。

### 彫刻部

細谷 泰茲

第78回展、新制作彫刻部の応募出品点数は106点（データ画像審査含む）、出品者75名であった。9月5日、6日の両日にわたって厳正に審査した結果、入選64点、入選者61名（初入選5名、5点）であったが昨年度に比して出品点数、出品者とも減少した。

彫刻作品の搬入はどんなに交通網が発達し、道路事情が整備されても遠方からの運送、搬入は困難である。そんな困難をとまなう搬入であってもそれをものともせず出品しようとする堅固な意思にはなみなならぬ意欲を覚える。入選作品は堅実な手法による具象作品から石、木、漆、金属等による大作まで多様であるが、高い水準が保たれその情熱には驚かされる。

彫刻部の魅力は何といても自由な表現、斬新で洗練された作品が創り出される原動力にある。作家が何を表現したいか、何を創らなければならないかを常に内にむかって問い、思考し、熟成されてから制作にかかり作品化されていく。作品になるまでには十分な

表 第78回公募作品データ

| 絵画 | 搬入者数 |     |       | 搬入点数 |      |       | 入選者数 |     |       | 初入選者 | 再入選者 | 入選作品数 | 選外作品数 |
|----|------|-----|-------|------|------|-------|------|-----|-------|------|------|-------|-------|
|    | 一般作者 | 小作品 | データ審査 | 一般作品 | 小作品  | データ審査 | 一般作品 | 小作品 | データ審査 | 23名  | 257名 | 290点  | 631点  |
|    | 286名 | 80名 | 13名   | 697名 | 192名 | 32名   | 222名 | 45名 | 13名   |      |      |       |       |
|    | 379名 |     |       | 921点 |      |       | 280名 |     |       |      |      |       |       |





時間を必要とする。展覧会場では一年間制作に励んだ成果が発表されるのであれば、作家を志す若者を惹き付けるのは当然の事であり、むしろ憧れであつたろう。

陳列後の授賞会議では新会員2名推挙、新作家賞7名が決定した。各々気鋭にして優秀な作家であり、将来が囑望される人材である。同時に来年度のシード作家（79回展無審査出品）3名が選ばれた。会期初日、大勢の出品者の中で行われたオープニングトークは新会員、新作家賞受賞者の作品紹介、作者の制作意図等を直接伝える企画であつた。9月21日に行われたギャラリートークも盛況であり、好評だつた。

今年度の陳列、展示はよく工夫考慮されバラエティーに富み会場を効果的に際立たせていた。3室とも活況を呈し緊張感あふれ、充実ぶりが発揮されていた。

#### スペースデザイン部 山下 勘太郎

全員で移動しながらの審査の方法にも慣れて来て、見直し、話し合う時間にも余裕が出来てきたようにも思いま

す。78回展の入選者数は昨年より一人増えて49人、最終的に入選者を決めるときには会場のキャパシティを考慮して入選点数の調整を相談し合意決定しています。このあたりの数が良いのかも知れません。年々元気の良い女性の進出が目立つような気がしていましたが、今回は予想をはるかに超えて入選49人の内43人、受賞5人の内4人までもが女性という結果でした。念のため申し上げますがこれは、晋三君の愚かな指示に依る結果ではありません。優れた女性達は自然に出て来るものなのです。

然は然り乍ら、男はどこいった！ 床置き作品が皆無と言えるほど少ないのもこの辺りに原因があるのでしょうか？

審査が終わると、8月末に陳列委員が会員の出品予定表を基に作品をプロットした会場模型に入選作品を加えて、陳列計画図を作ります。陳列当日の作業は出品者、会員共に一緒になって計画図をもとに進めます。一通りの仮置きがすんだ状態でそれぞれの意見

を聞きながら全体を見直しバランスをみて調整し陳列を終了します。入選作品の中には展示の難しいものもありますが、なるべく良い状態での展示になるようにという会員の入選者への事前のヒアリングやアドバイスも的確になってきたようで作業もスムーズに進み活気に満ちた会場になったように思えます。

かつて、三部合同の懇親会で場慣れぬ若い私たち（そんな時期もあった）がSD部の先達の周りに集まって居たところに一人の創立会員の方が寄ってこられて、グラスを片手にこの展覧会に並ぶ作品は全て平等なんだよと、そして並び会う作品同志のぶつかり合うエネルギーこそが活気のある展覧会を造るのだと、だから君たちも思い切って挑戦しなさい、と熱く語っていらっしやつた。そして、今、その事を思い出しています。

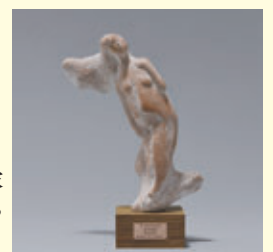


#### 「思い出は雲の中に」(遺作)

テラコッタ, 31×22×12cm 橋本 裕臣

#### 『賞牌』

第78回展新作家  
賞受賞者に贈  
られました。





## 『表現をめぐる』

丹尾安典早稲田大学文学学術院教授と新制作協会絵画部福田徳樹による対話  
(2014. 9. 20於 国立新美術館講堂) その概要の報告

絵画部会員 福田 徳樹

第60回新制作展(1996)の会報に丹尾先生(以下氏と略させて頂く)に「身のおきどころ」としたエッセーをパリから寄せてもらった。「われわれはまさにここに生きている」としたイリア・カバコフ(1933-)の大インスタレーションがポンピドーで開かれ話題となった年。団体展が総じてかかえる展示を見た後の無味な印象を暗にほめかされるのと同じ問題意識に満ちた、状況を伝える明快な文であった。昨秋、久しぶりに本展を見てもらった後の感想を聞いた。

「ポエジーですよ、各人の資質に合った。」言葉を失った。

その時、この対話は計画された。  
(以下、主要な発言をT、Fと省略した記号で示す。)

T. 氏は、2004年頃から沖縄の陶器に引かれ調べ始め、早稲田大学會津八一記念博物館で「沖縄の壺体 國吉清尚」展(2006.7)(國吉の生没年は1943~99)として氏の企画展が開かれた。どびんなども入った、地元産の土石を使った独自の造形。生活の器的なものを商用としようとした人が訪ねた時には敢然としてオブジェを作っていて目的にはならず。自ら空手6段で、8段の師の言、相手を握るのではなく相手を拳で内に握るのだと教わったとの一言を信じていたようだ。ここにすで

に表現の要諦が語られ始めた。氏は國吉に会っていない。独自の眼で発見したのだろう。(私も同展に出ていた、器とはもちろん違い、石ころではない、細片とよりいえぬものにこめられた器体をいくつか見たが、打たれるものがあつた。自らのためにのみ作っていたものだろう。國吉は自らの竈の火をくべた中に入り自死した。)

次いで本展の展示壁面の接ぎの部分の眼ざわりについて。また作品の下ぞろえの陳列からくる不自然さなど、時間的制約、あるいは経済性などを十分理解しながらも、今後の美術館(アートセンター)の設計に関わる根本的な問いが発せられた。例えばヴォルフガング・ライプ(1950-)は床面の平面さを十分に使ってから花粉によるインスタレーションをしている。

早大の記念博物館の前身は図書館で今井兼次、1925年の設計。6本のいささか日本化されたアールヌーヴォー調の面白い円柱は、左官中島武一によるが、開館1週前にまだできず叱られる。しかし念には念を入れているのであり、さぼっているのではないという。約束の日の暁時、妻子をその前のござに坐らせて最後の鋺を使って見せて、帰ったという人情話のような一説の文も資料となった。

F. 1950年初め頃美術学生にかさのようにかかっていたのはセザンヌ。

ファイドン版の画集は宝の如く、すり切れるほど見た。間もなく20世紀アメリカ美術が来ると、震撼が走り、圧倒された。しかしセザンヌは1906年に没し、その翌年、日本では文展が開設。21世紀に入り、では20世紀最大の画家はと自然に考えてみた。アンリ・マティス(1869-1954)が来た。最近、1993年NY・MOMAで開かれた時の大画集を親友にもらい、その少し前にヒラリー・スパーリング著『マティス 知られざる生涯』(2012白水社)の大冊の好著が出て読んだことにもよる。今回あえて彼の10点にしばらく映像としてアトラクション的にした。

始めたばかりの21才、第2作と裏に書いてある燭台と本の静物画。背景部分の数量的な配慮。そして秀作「会話」(39から41才にかけて)。特に、広く青いバックにパジャマ姿で立つ男の横全身。対して椅子にかけて話しかうかの女性像の又横の坐像の組み合わせ。ルーヴルのアッシリアの石像にヒントをえたという。まっすぐに立つ男の像の位置に修正の跡が。崇高とより言えぬ単純。

すぐ2年後の「モロッコのカフェ」の図の2つはいずれも37点のマチスを持った蒐集家シチューキンの、現エルミタージュ蔵。共に約150号大。これは全面煙るようなテンペラ画の中にいこうものうげな6人の男。そして47才頃の名作NY・MOMAの「モロッコ



福田徳樹氏(左)、丹尾安典氏(右)



の人人」。デッサンと色彩が敢然として。もし唯1点とすれば、これを選びたい。世界の、歴史の不思議さまで表現しきっている。

「色彩は想像力から生まれ、思考そのものにならなければならない。」彼の言葉である。

71才の病を機に彼は、グワッシュで彩色した紙を切り、貼りつけた制作に転じる。最後の3年をかけたロザリオ教会。そのまことに小さな空間ゆえに、床面に近い厚さ約15cmくらいか、ガラスの中に立ち上る気泡が観察される。意図的だろう。

マティスは60代にアメリカに行ったが描かず、ひたすら見ていたらしい。この巨匠の最後を見とったアメリカの前衛達は、尊敬を失わずとも各々の道を、組みしやすさを感じながら進んだものではなかったか。

マティスは若き日にルーブル、そして特にパドヴァでのジョットに大きな感激を受けている。そしてフランス人としてドラクロワ、マネにしっかりとつながる伝統の画家ではなかったか。

T. ダニエル・ビュラン (1938-) がグッゲンハイムの建築設計の全て円周的な内側ホールを中心部に大きな、例の青と白の縦のラインの入った旗状の幅の広い布を対立的になびかせたことがある。何くそ、周囲に消されまいとする精神ではなかったか。

次いでアウシュビッツの例。26才で死去のシャルロッテ・ソロモン。ベッドわきに立つ叔母の小さな（おそろく）、ちょっとノルデ風の、ピンクのトーンの水彩画が映った。叔母が苦しんでモルヒネを飲む直前、ソロモンは自ら窓から飛んだ。

また氏の企画による早大での「無垢の眼」展 (2008.6~7) はアウトサイダー展。4人の女子を集めた。その一人ダウン症児宮田佳代子の刷毛を使って軽快、かつす早い単色の中に交錯する筆触の生氣。横長の画。「無垢の眼II

尾崎直彦の元気」展も開いている。

F. マティスの画室を訪ねた佐藤敬の記事。揮発性油とアルコールを含んだ大量の脱脂綿片を見た。彼は、これを木炭デッサンの下地を消しながら、少し残しながら、下塗りのようにして行ったのではない。また彼が、故郷のカンブレジで最初に一時入った美術学校はむしろ工芸中心で、彫刻の課題も多かったと記している。彼の初期人体油絵に秀作の多い因となるものだろう。

T. オズワルド・チルトナー (1920-2007) オーストリア人でドイツ軍に応召、スターリングラード線でフランス軍に捕えられ南仏の収容所で精神に異常を来す。四つ足でやっと立ち上ろうとするかの、鹿であるかの上半身の構図の水彩。また病める10人の画家達を追った傑作ドキュメント「遠足 DerAusflug」(2000年作) さらに2008年滋賀県美での「アール・ブリュット展」のこと。治療を進められ断り切れずに筆を執ったタイプの10人。市場価値もあったが、制作は疾患ゆえのことで打算ではなく、とって無垢とも違い、そこに独善や苦悩が渦巻いている。

F. (華麗なまでにスピード感に満ち、めくるめくような氏の示す映像の展開に見とれた。)

T. ネガティブな感情のその絵は楽しいデザインとは遠い場所にある。しかし人をひきつけてやまない。情熱や独善、苦悩などが渦を巻いている。

F. (映像の用意はなかったが「ヤゲオ財団コレクション選抜展」(東近美2014年 6~8月) で見たピーター・ドイグ (1959-) の1図のカラーコピーを見てもらった。「カヌー・湖」(1997 布・油彩 2×3m) 密林の沼のコースに横向きに浮かぶ一そう。緑

と黄のトーン。手前に金属的な黒い低い柵がある。舟上に、疲れたのか緑の少女が1人川の水をすくいながらいる。その軽快さ。

もしこの1点が本展にまぎれていたとしたら。作り上げるだけを目的としたものといかに違うだろう、と。なおこの財団は台湾・高雄にあり、オーナーは、あのシチューキンのようにひたすらオフィスの全面を現代の秀作で飾りつけて楽しんでいるらしい。)

T. そしてプリンキー・パレルモ (1943-1977)、イミ・クネーベル (1940-)。クネーベルのセメントの小片を任意に練り上げて、その一部が生乾きの状態の時に部分的に色料をかけ、立体とした作品は生氣に満ちる。

ハギアソフィアのモザイク壁画、アングルのデッサン、谷内六郎の初期作。トニー・クラッグ (1949-) と続き、最後に、氏は韓国のボジャギの美しさを例とした。食材などの上に置く布。女たちが端ぎれでつくる、蠅よけのようなものをいう。

以上、見ていて氏の考えの中に平面絵画の表現に限定されるのではなく、彫刻・建築・デザインの領域を横断してその可能性が追及されていた。そこにポエジーの問題が浮かんでいた。

少し古い言葉使いになるかもしれないが、表現にそなわらねばならない魂魄について追ろうと述べられたのだろう。

改めて、今回の企画のパンフレット中の一文の一部を上げさせて頂きたい。

「表現は精神文化なのだとおもう。その高さは精神文化の営みと連動して獲得されるはずだ。基本的な問いをもういちど発してみよう。」

(丹尾安典先生のご尽力に感謝する。また委員各位、CDを採録のSD部会員杉田文哉氏の協力があったことを記しておく。)

## 田園調布純粹美術研究室

絵画部会員 糸田 玲子

猪熊弦一郎先生の提唱で創られた田園調布純粹美術研究室について記録を残したいとの新制作広報誌からの依頼で、私が筆をとることになった。出身者が次々と彼岸へ去り、高齢化もし、知る者も少なくなったということで九十才の私にお鉢が廻ってきたけれど、私としても記憶以外に、記録してもないので、どこまで書けるかと思っている。つまり個人的なことから書き始めるしかないかと…。

1947年(昭和22年)田中田鶴子氏(元新制作会員)にともなわれて猪熊先生のアトリエを作品持参でお訪ねした折、田園調布純粹美術研究室(名称が長いので以後、研究室とする)に入ってはどうかと奨めて頂いた。

敗戦後の日本は荒れはてた焼跡の町で、食べるものも礫にない時代だったが、戦後間もなく、先生のアトリエに有志が集まってヌードクロッキーの勉強が始まったのが、この研究室のはじまりと聞いている。

(敬称略)古茂田守介、行木正義、深尾庄介、大住閑子、赤穴宏、田淵安一、山東洋、アストロロゴ原田ミナミ他、多士済々の方々が集まったとか(皆、故人となった)

私が初めて研究室を訪れたのは戦後2年目の先生のアトリエをお訪ねして間もなくの1947年で、当時は大田区東玉川町、町会事務所の夜の空き室を3時間借りてヌードデッサンをしていた。会員・行木正義(当時は協友)が会の責任者として猪熊先生に委され、先生

は月1回、画談会というかたちで皆が持ち寄った作品の講評をされていた。夜のデッサン会は毎晩あり、私の通った五年間は、とぎれることなく続いたと記憶している。

画談会の時は、50人位参加していたが、普段は20人～30人がレギュラーメンバーだったろうか。近藤茂(会員)、近藤正一(現建築家)、三輪正弘(建築家)、三枝守正(建築家)など建築家を目指すメンバーも当時、学生だったようだが熱心に通ってきていた。

赤穴宏、山東洋、糸田芳雄、原田ミナミ、井上晴、大橋泰、高木雅章(現会員)等も毎日通っていたように思う。町会事務所が都合で使えなくなり、田園調布駅近くの個人のお宅の応接間を借りて暫らくは、そこで勉強したが、手狭な為、後に幸い環状8号線踏切近く(田園調布駅近)の集会所の二階を借りることができ、これは広い部屋でゆったりと描くことができた。

若者たちの交流も盛んで深尾庄介×大住閑子のカップルを初めとして赤穴宏×塩谷桂子、かく言う糸田芳雄×大盤玲子など、その他数組のカップルが生れたりした。やっぱり世間は狭くて身近な所で伴侶を求めようだと今になって思う。後に高津鉄朗×名柄禎子など研究室出身のカップルもできたが、私が行かなくなってから後に、研究室に入られたと記憶している。(間違ったらごめんなさい。)

戦後間もない当時は、再び絵を描くことの喜びと希望にあふれていて、お

互いに将来あるべき姿に議論百出だったが誰もが皆、貧乏で、一生懸命さだけは人一倍だった。

いわゆるカストリ焼酎時代。といっても今の満ち足りた作家たち世代には本の世界でしか判らないでしょうが、デッサンのあとの、なけなしの小遣いを使っただけの議論は屋台のカストリから生まれたものなのです。

猪熊先生が、その後、間もなくフランスに行かれることとなり、結果はニューヨークに留まって活躍されることとなるのだが、先生の行かれたあとの画談会は荻太郎氏に講評をお願いしていた。

猪熊先生がいらっしゃらなくなったということで自然消滅の形で研究室が解散したのだろうか？ その辺のことは余り良く判らない。

それにしても私自身、貧乏で碌に会費とかゆうものを払った記憶もなく、近藤茂はストーブ係として会費免除になっていたようだし、どうやってやりくりしていたのだろうか？ 会計の近藤正一はかなり苦労したと思う。

そう言えば金山康喜も会計していたっけ。その内パリに行ってしまったが彼も既にいない。

ここに書き切れない多くの作家を新制作に限らず他会やフリーでも輩出した研究室だったが、その名の通り、「純粹」という根っここの所は、ここの出身者たちの心の中に育っていて今にきていると私自身もそうだけれど皆もそうなんだと信じている。



ギャラリーオカベ 銀座 個展で猪熊弦一郎氏を囲んで(1978年6月)



糸田玲子画集より



## 新 会 員 紹 介

### 絵 画 部



板谷 諭使

新制作展には他の会にはない厳しさ、洗練された密度の高い作品群とスマートな展示、シンプルな賞に魅力を感じ、初出品から24年間出品を続けてきました。

今後、一般の時とは違う責任と緊張感がありますが、感性のアンテナを高く張り、五感を鋭くし、魅力的な作品を発表できるよう魅力的な生き方を心がけていきたいと思っています。未熟者ですが今後とも宜しくお願いいたします。

◆1961年 北海道生まれ  
1983年 北海道教育大学教育学部美術科卒業  
1990年 第54回新制作展初入選  
第76、77回新制作展新作家賞受賞

### 彫 刻 部



江村 忠彦

この度は、会員にご推挙下さり、衷心より感謝申し上げます。新会員として「新制作」は憧れであり、「新制作展」という場で彫刻を考え続けてみたい」と思い描いてきました。この度のご推挙を深く受け止め、これからも一つ一つの発見に学びながら、次に繋げていきたいと思っています。

会員としてより一層、自分の課題とするとことを深く、新鮮な眼差しで追究していきたい所存です。今後ともよろしく願い申し上げます。

◆1984年 岡山県生まれ  
2012年 筑波大学大学院博士後期課程修了  
2009年 第73回新制作展初入選  
第76、77回新制作展新作家賞受賞



ゼロ・ヒガシダ

三十才までに芸術の基礎を確立し。四十才までに芸術性を養い。五十才までには天命を悟り。六十ぐらいには作風を確立し。七十になってからは自由自在で。八十になれば無心になりたい。

今年で4回出展させていただきました。いつも精一杯努力はしているけれど芸術の道は険しく気を緩められない。藝術に終わりは無く永遠に続く長い旅路。今は亡き先人達のごとく、会員としての高貴性とモラルを保ち新たな芸術性を追及しつつ、よりいっそう精進し、会の一員として奮起して行きたいと思っています。またこれからは初心に帰り、新たな発表の場として謙虚に挑みたいと思います。

◆1958年 広島県生まれ  
1984年 日本大学美術学部芸術学科卒業  
1986年 東京藝術大学大学院  
1988年 New York Studio School入学

### 新作家賞

#### ■ 絵画部

海野 厚敬 奥山 久美子 金井 健一  
近藤 オリガ 下倉 剛史 大道寺 里子  
森 愛子 山根 康代

#### ■ 彫刻部

大野 良一 高家 理 小松 俊介  
田島 享央己 濱田 卓二 原田 理糸  
藤原 逸樹

#### ■ スペースデザイン部

五十嵐 通代 伊藤 清子 中曽根 清子  
萩原 真輝 半澤 友美

#### 絵画部賞

桜岡 みゆき 関水 英司 竹本 義子 鶴川 勝一  
仲田 道子

#### 損保ジャパン日本興亜美術財団賞

渡辺 有葵



佐野ゆい「ル・ソワール回想」より  
(三好企画 発行、2014年10月31日発行)

### 訃 報 (平成26年10月末現在)

新制作協会発展に尽力されました故人を偲び、心よりご冥福をお祈り申し上げます。



富松 孝佑

彫刻部会員

平成26年5月9日逝去  
(享年79歳)



日高 單也

SD部会員

平成26年5月13日逝去  
(享年73歳)



丹下 寿一

彫刻部会員

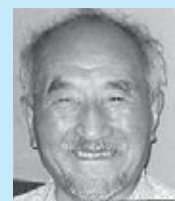
平成26年5月16日逝去  
(享年89歳)



橋本裕臣

彫刻部会員

平成26年5月28日逝去  
(享年71歳)



大国 丈夫

彫刻部会員

平成26年9月15日逝去  
(享年90歳)

## 受賞作家展

### ■ 絵画部

2015年1月19日(月)～24日(土) 11:00-19:00

[初日] 13:00～ [最終日] 18:00終了

会場：銀座井上画廊 TEL.03-3562-1911

中央区銀座3-5-6 (松屋前) 井上商会ビル3F

● オープニングセレモニー：1/19 (月) 17:00-18:00

● オープニングパーティ：1/19 (月) 18:00-20:00

会場：「えん」銀座店 TEL.03-3538-5496

### ■ 彫刻部

2015年2月9日(月)～2月20日(金) 11:00-18:30

[最終日] 17:00終了, 2/11(水), 15(日) は休廊

会場：ギャラリーせいほう

中央区銀座8-10-7 TEL.03-3573-2468

● オープニングパーティ：2/9 (月) 17:00-18:00

### ■ スペースデザイン部

2015年2月9日(月)～2月14日(土) 10:00-18:30

[初日] 13:00～ [最終日] 17:00終了 (会期中無休)

会場：建築会館ギャラリー

港区芝5-26-20 TEL.03-3456-2051

● オープニングパーティ：2/9 (月) 17:00-19:00

### ● 入場者数

第78回新制作展の入場者数は、全日程合計：45,856人  
(無料・一般有料入場者合計) でした。

### ● 巡回展

○ 京都展

10月17日(金)～10月26日(日) (10/20 休館)

京都市美術館

○ 名古屋展

11月11日(火)～11月16日(日)

愛知芸術文化センター／8Fギャラリー

○ 広島展

11月25日(火)～11月30日(日)

広島県立美術館 県民ギャラリー

### ● 新協友

#### 【絵画部】

大橋 弘子、小口 清一、下倉 剛史、七栗 かつ子、  
萩野谷 弘子、廣川 裕子、藤野 ミナ子、森 愛子

#### 【彫刻部】

大野良一、小松 俊介、田島 亨央己、原田 理糸、  
藤原 逸樹

#### 【SD部】

伊藤 清子、中曾根 清子

### ● 第79回 新制作展の開催案内

開催期間：平成27年9月16日(水)～28日(月)

搬入受付：平成27年9月2日(水)～3日(木)

(各作品の一般作品及びSD部のミニチュール作品)



(上から) 受賞式 絵画・彫刻部 ギャラリートーク、  
SD部 レクチャー

## 伝言板

1. 物故彫刻部会員丹下寿一氏のご遺族から、展覧会欠番図録のご寄附がありました。

株式会社バクトル様より、26回展図録のご寄附がありました。大切に保存させていただきます。

SD会員杉田文哉氏からも会報・図録・目録の寄附がありました。

1～31 35 36 39 40 44回展の図録で寄付可能な号がありましたら皆様引き続き宜しくお願いします。

2. 古い資料が出てきたのでIT委員会の河西氏がデータ保存を行ってくれています。初期の審査風景など興味深い写真もあります。

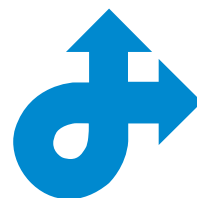
3. 5月に退職する小地谷さんに代わり事務職員は吉田知世さんになります。

尚、事務局オープン曜日が火・木・金 10時～17時に変更になりました。



## 編集後記

78回展企画のコーナーと新制作生みの親・育ての親No.12は今回紙面の都合で休ませて頂きました。原稿をお寄せ頂いた方々には厚くお礼申し上げます。 [広報委員一同]



## 新制作協会

〒160-0022

東京都新宿区新宿6-28-10 大阪屋ビル202号

Tel: 03-6233-7008 Fax: 03-6233-7009

URL: <http://www.shinseisaku.jp/>

E-mail: [webmaster@shinseisaku.jp](mailto:webmaster@shinseisaku.jp)

発行/新制作協会

企画・編集/広報委員会広報誌編集委員

千葉文隆、辻井久子、岡 孝博、

永津 守、中野 威

監修/福田 徳樹

製作・印刷/株式会社バクトル

発行日/2014年12月吉日

\*広報委員会では、新制作展に関わるニュース、伝言、ご批判、ご意見をお待ちしております。お気軽にお寄せください。次号をご希望の方は協会事務所迄ご連絡ください。